プレビューとしての書評｜私に聞こえていたのは誰の声なのか？

清田隆之

炎上、メディア・リンチ、社会的制裁、ジェンダー格差、セクシュアリティ、マジョリティ男性、ご近所トラブル、家族のあり方、地域社会、自他の境界線、言葉の暴力、利己と利他、新型コロナウイルス、芸能人化するコメンテーター、ブルシット・ジョブ、監視社会、持続可能性、気候変動、脱炭素、オーガニック、オーガズム、科学とスピリチュアル、自己責任論、メンタルヘルス、過剰適応、ケアと共感、正義とは何か、コミュニケーションとは何か、愛とは何か――。

私の頭には今、このような言葉の数々が渦巻いている。これから書いていくのは、範宙遊泳・山本卓卓が書いた戯曲『心の声など聞こえるか』に関する書評だ。私は普段「恋愛とジェンダー」を主なテーマにしている書き手で、小説やエッセイの書評を書く機会はあれど、こうして戯曲を書評した経験は今までない。そもそも演劇作品とは、戯曲に演出が加わり、稽古場や舞台上での様々な試行錯誤を経て劇場に立ち現れるものではないかと思う。ましてや今回は、これまで作・演出を兼任してきた山本が戯曲に専念し、演出を川口智子が担当するというスタイルにひとつの特徴があり、戯曲だけを見て何かを書いたとしても作品の魅力のどれだけを伝えられるのか……という話でもある。

それでも読んで欲しい。『心の声など聞こえるか』という作品の土台をなすこの戯曲を。演出家や俳優たちは、ここに書かれている言葉を何度も何度も、それこそすり切れるほど読んだ上で身体に落とし込んでいるはずで、その一端に触れることは、演劇作品をより豊かに体感することにつながると思うのだ。

場面は郊外の住宅街にある一軒家のリビングから始まる。ここには「若い見た目の妻」と「そのパートナー」が暮らしている。夫が出社したあとの午前8時20分、突如玄関のチャイムが鳴る。インターフォンの画面には隣人の顔が映っている。どうやらゴミの出し方についてクレームを言いに来た様子だ。

この物語には5名の人物が登場する。先の夫婦とその隣人夫婦、そして週刊誌の記者と思しき男性の5人だ（ちなみにこの戯曲には、隣人夫婦および週刊誌の記者の性別を変更しても構わないという旨が書かれてあり、とても興味深い点だ）。どの人間関係も不穏な空気をまとっている。若い夫婦の会話はどこかすれ違っていて、セックスレスである様子も示唆されている。隣人夫婦の夫はゴミ出しの監視に異様なこだわりを見せ、妻は少し前までニュース番組でコメンテーターをしており、何かで炎上して社会的制裁を受けた痕跡がある。二人は仲睦まじくもあるが、一方で埋まりきらない溝のようなものも感じる。そして、その妻を執拗に追いかけ続けているのが記者の男性だ。

そんな5人が入れ替わり立ち替わり登場する本作では、モノローグ（独白）とダイアローグ（対話）の混在も見どころのひとつとなっている。戯曲には例えば、「え、なんですか？／なんだこいつ。」という具合に口から発せられる言葉と心の中でつぶやいている言葉が並列で表記されている。範宙遊泳の演劇と言えばプロジェクターを用いて背景に文字や画像を投影する演出が印象的で、心の声もそのように表現されるのかなと想像する。しかし、言葉の次元はもっと複雑に混在している。SNSの裏垢に書き込まれている言葉もあるし、対話そのものが誰かの妄想というケースもあるし、時間や空間がいきなり飛んだりもする。また、物語の終盤にはこんなシーンが登場する。

3　（顔がスッキリしている）なんの話をしてたの？楽しそうに笑ってたけど。
4　それがね（笑いを堪えながら）それが・・・。
（一同爆笑する）
5　とくに何も話してないんですよ。口をずっとパクパクさせてただけで。ほらこうやって。
（口をパクパクさせているようにリアクションをとったり）
2　エキストラみたいでしょう？　映画の。パクパクさせて。
（爆笑する）

前後の文脈はぜひ劇場で確認してもらえたらと思うが、「口をずっとパクパクさせてただけ」というのは個人的にゾッとするセリフだった。というのも、もしかしたらすべては誰かの頭の中のできごとで、実際には誰もしゃべっていないどころか、この人たちは誰も存在していないという可能性だってあるかもしれない……なんてところまで想像が広がってしまったからだ。

ゴミ出しをめぐるご近所トラブルがいつの間にか「脱炭素」を思わせる環境問題へと接続されている。SNS の裏垢に書き

込まれた主婦の愚痴から日本社会における雇用や同調圧力の問題が浮かび上がる。炎上したコメンテーターと追いかける記者のやりとりには大衆の欲望と資本主義の論理が絡んでいる。すれ違っているのかかみ合っているのかよくわからず、SF のようでもあり現代的な物語でもあり、空疎なようでいて本質的なようでもある。

山本は「ぴあ」のインタビュー記事で「たったふたりという家族の最小単位から、日本社会が透けて見えてくるような構図に出来たらと思って書き進めていきました」と語っているが、まさに現代社会のはらんでいる問題が次々と想起させられるような体験だった。

この戯曲を読みながら、個人的に色濃く思い出された出来事がある。それは趣味の草サッカーでかつてチームメイトだったある男性のことだ。その人は私よりも 5 歳くらい上で、加入時は初心者みたいな感じでお世辞にも上手とは言えなかった。しかしとても熱心な人で活動には欠かさず参加していて、努力の甲斐あって着実に上達していった。まわりのメンバーも優しくサポートしていた。しかし、そんな彼のことを私はどうしても好きになれなかった。

草サッカーチームというのは運営がなかなか面倒で、グラウンドの確保や対戦相手のマッチメイク、出欠状況の把握やお金のやりとり、道具の管理やメンバー間のコミュニケーションなど、様々な仕事が必要になってくる。また、監督を兼任しているメンバーが出場選手やチーム戦術を毎回ちゃんと考えてくれ、事前の練習やウォーミングアップなどにもそれぞれ担当者がいる。そうやって持ち出しの労力の上に成り立っているのが草サッカーチームなのだ。

彼は確かにモチベーションが高く、一生懸命だった。しかしサッカー歴が短いため担える仕事がほとんどない。趣味の活動なので参加した人は平等に出場時間が与えられるが、彼が出るといわゆる“穴”になってしまい、ボールを失うことも多いし、戦術に沿った動きもなかなかできない。でも彼は自分のプレーに精一杯で、全体のバランスを崩していることに無自覚だった。私は次第にそれが気に障るようになり、それがどんどん膨らんでやがて彼の存在がストレスになっていった。彼はチームの資源を食いつぶしている、それはチームにとってマイナスではないか、彼がいなければもっとうまくチームが回る、ああ、マジで辞めてくんないかな……と、リアルに 10 年近く悩み続けた。

結果的に選手の若返りもあり、今後は出場機会が確保できそうにないことをチームの代表者から伝え、彼は退団することになった。私を含む運営メンバーの話し合いで決まったことではあったものの、スッキリした気持ちとともに「排除してしまった」という罪悪感が残り、個人的になんとも後味の悪い体験となった。

この出来事を思い出したのは、ご近所トラブルに付随する「嫌いな人と共存できるか」という問題が共通していたからではないかと思う。私は心の声をちゃんと言葉にして伝えることができなかった。「チームのため」という大きな布で私個人の心の声を包んでしまった。さらには彼の心の声を勝手に捏造して勝手に受信し、一方的に被害感情を募らせたりもしていた。私の態度はまったくもってダイバーシティでもインクルーシブでもなく、非常につらい。でもあのまま我慢し続けることは不可能だったとも思う。どうすればよかったのか、いまだにわからないままだ。

〈私たちはひとりひとり正義を持っています。どんな人でもです。程度の差こそあれ、正義を持たない人間は社会生活ができないのです。でも、そんな正義ある私たちに・・・私たちに心はありますか？　愛はありますか？　そしてそれがほんものであるかを検証していますか？　きましたか？　私は、愛か正義かを天秤にかけた時、愛をとりたいと考えています〉

さて、演出家や俳優たちの読解やアイデア、また舞台上の様々な工夫や仕掛けを通じ、この戯曲からどんな演劇作品が生まれているのだろうか。そこにはテキストだけでは読み取れないたくさんのものが含まれているはずだ。戯曲を読んでから劇場に行くのもありだし、舞台を観てから戯曲を読んでみるのもありだろう。『心の声など聞こえるか』という問いを、頭で、身体で、ぜひ体感してもらえたらと思う。

清田隆之（きよたたかゆき）
1980 年東京都生まれ。文筆業、恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表。早稲田大学第一文学部卒業。これまで 1200 人以上の恋バナを聞き集め、「恋愛とジェンダー」をテーマにコラムやラジオなどで発信している。『QJWeb』『日経 doors』『共同通信』『すばる』『現代思想』など幅広いメディアに寄稿。朝日新聞 be の人生相談「悩みのるつぼ」では回答者を務める。著書に『よかれと思ってやったのに――男たちの「失敗学」入門』（晶文社）『さよなら、俺たち』（スタンド・ブックス）などがある。新刊『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見えた生きづらさと男らしさのこと』（扶桑社）が 2021 年 12 月に発売。女子美術大学非常勤講師。
Twitter→@momoyama_radio